

る。尙ほ此等の顛末内情に就いて詳説すべきであるが、餘りに長文に涉り誌面をふさぐを以て一先

づ茲に筆を擱くことをする。

世界史の使命 (一)

元東京帝國大學教師 伯林大學講師

ドクトル ルード井ヒ・リース 原著

文學博士 坂口 昂

文學士 安藤 俊雄 共譯

譯者いふ。本篇はリース博士の近著、『世界史』第一卷の緒論を形作るAufgabe der Weltgeschichteに題する一章の譯文である。この章十二節に分れ、原書の卷首四十七頁を占む。本號収録する處はその前約三分の一に相當し、殘部は尙ほ次號以下に續出すべし。原著には殆んど本文に同一分量の頗る用意周到なる備考が添へられて相俟ちて讀者の啓發に資する所あるも、譯者の業のまたこゝに及び得ないのは遺憾である。然れども譯文

は出来るだけ原文原意に忠實に、而も原書との對照なしに理解しうるやうに努めたから、庶幾くば本篇の讀者も、吾が史學界に因縁淺からざる老史家から宛がら上掲の重要問題に關する所論が親しく講述さるゝを傾聽するの感あらんことを。若しそれ原著全體につきては本號別に所載にかゝる共譯者の一人の品性に屬目されたい。

第一節 歴史考察の原理

如何なる人ゲマインシャフト・ウン・メンシエン間グロウペン團體グロウペンでも、長い間種々雜

多の共通の利害によつて結合されて居る以上、必ず或る自覺を有つ、即ち各自の現在の境遇が、それ以前の、而も尙ほ人の記憶に活き残る時ツァイトモメント點

に於けるそれに比して、一個の本質的に違つたものに成つて居る、而して、かくの如き幾多の變化が、互に不規則な隔りで、一個の系列を作りて、以てその團員中の故老たちの思ひ出の裡に固く保持されて居るといふ自覺である。苟もかく共通のゲマインザイ關心グライツェンゼで結合せる人間圈に所屬する、より成熟しより知識ある者は、これほどあり／＼目に著くやうに成つた諸々の變化を、それらを實現さした原因まで突き留めやうと云ふ慾求を感ずる。されば彼等は、自分が自覺して生き貫き、若しくば祖先が自分らにその報道を傳へくれた所の、一様に過

ぎゆく時世の中から、自分らにより近く横はる状態に、一個の、その時まで自分らの思ひ出のまゝ

殘存する關係とは、違つた姿を興へたる或る一定の事變を選び出すを常とする。かく、從來の或る特殊が消え去つて新しい状態が現はれ來る誘因と見らるべき、この事變の、前若しくば後を以て過去の表象を前の時代と後の時代とに差別してこそ、過去の事象に關して固持される人々の思ひ出の寶庫に、始めて明瞭の光と連絡の糸とを齎らし來り得るなれ。かくの如き、實に思ひ出の影像の時間的順序を支配する事變は、人々に取りて重大なる關心を有するが故に、絶えず繰り返し語られて次の世代ゲネラチオンに傳ふべき出來事として特に力説且つ尊重される。狭き範圍に於てでも、或る大火とか洪水とかの如き、偶然の出來事が尙ほ久しく語り草となり、是等の非常現象の出現に従つて、その年その年を記する風がある。之に結びついて當

該の利害關係圈に取りて、一定の出來事と連繫する結果影響如何といふ考が起り、隨て、一個の、記憶の働を助け、後の思ひ出を獎める因果連絡が容易すく作られる。

かくの如くして生じ來り、その中に連絡を有する過去の表象影像是、生ひたちゆく人類の有のまゝの縮寫である、かくの如きものとしては、他の數多の口碑とは著しく選を異にする。口碑は成程その間にも因果の連繫を有してその內的秩序を保ち居るも、一定の時と一定の場所とに就てその事件が貫行され、而してそれが觀察され、然る後に眞實に語り繼がれたといふ確證は之を缺いて居る。過去の出來事及びその影響を及ぼせる現實狀態のまゝを反映せる『物語』こそ、吾人が克ち得たる體験として尊けれ、これに反して一見これと全く類似するも、事物の眞實との如上の關係を缺いて居る物語に對しては、よしや『內的に眞實なり』と

認許せられ得るとしても、之に對して眞の關心が喚起せらるゝのは、只だ經驗せられたる現實と比較し得る尺度如何に因るのみである。恣に勝手氣儘なる空想に發したるこの種の『物語』は、その單純さ、その明晰さ、その情意ゲイムユートに對する印象に於て容易に他より優越せる地位を占め得るも、それが反覆せらるゝにつれ、次第に珍奇の刺撃と共に世人の注意から消え失せてゆく、之に反して現實に起る出來事及び經驗ウラウラしうるやう現はれ來る變化なるものは、吾々に不斷の新味を加へて、一層その理解も高められる、何せなら、千種萬別の人事關係の連繫が絶えず理解の上に新光明を展開しゆくから。宜なる哉、大史家ランケが吾々の願慮を喚起せる言や、曰く、歴○史○の○思○ひ○出○の○寶○は、是れ正さしく人類の財貨中、特種の珠玉である、この珠玉は天才が詩歌、美術、學問に於て創作產出したものと相並びて、忠實に擁護せられ、長く後世に

傳承されなければならぬと。

然りと雖も、若し吾々は自己の觀照によりて知り得たるもの、又は口碑により傳へられ得たものに、現實に關する概念を齎らして之に配して居らなかつたならば、過去の幾多の影像を固く繋ぎ留めることは全く不可能であらう。この現實概念は既に幼少の時に吾人の意識中に形成し始め、經驗のより熟するにつれて、愈々その明瞭さとその精確の度を増し、人生の最高潮に達して、始めて充分確實となり、全くこれに信賴するに足るに至るのである。この經驗界の種々異つた複合現象を比較することは、常にその内的感知を豊富ならしむるのみならず、また現實の理解を愈々高く進め得せしめる。この事實は既に草昧なる古代に於てもすべての民族に自明なりと云ひ得る。現實を把握する精確の度如何に俟つところ多きこれらの重大な決定は、豊富なる經驗を積みたる故老達に委ね

られて居る。されば世智長けたイタカの王オディソイスは特に贊辭を呈されて居る。曰くこの君は數多の人間の國々を見て彼等の心に通曉し給へりど。こゝを以て科學的歴史考察は、既に獲られたる經驗、もしくは吾人の到達し得べき經驗の一個の豊富なる内容を豫想するものであつて、又吾人の意のまゝに使用し得べき意識材料を擴大し、整頓し、且つ明瞭にすることを、その目的として居るのである。されどこの科學的歴史考察が之をなすのは、他の多くの精神科學と異なり、あらゆる思ひ出の本質そのもの、中に何の面倒な手續なしに許與されたる一個の原理に隨ふものである。

凡そ歴史考察は、科學の體裁を具ふる以上、統一體として把握されたる經驗界の對象にまで擴がり、この對象を不規則ニヒトレゲルイシヒに繰り返す本質的なる幾多の變化を因果關係によつて、理解することに努めなければならぬ。かくしてこそ吾々は、例へば、

エルベ河東の境國、ブランデンブルグ選舉侯國、フリードリッヒ大王の國家としてのプロイセン王國又はチルジツト平和後改革せられ、一八四八年後立憲的と成れるプロイセン、即ち當時北獨聯邦の中核を形造り、而して新獨逸國に於て牛耳を執りつゝある國家プロイセン、以上のものを一個の統一ある歴史的群像として把握するのである。吾々は如何なる國法上の演繹、又は統計上の報告によることも、この歴史的群像につきて精確な理解を得ること出来ない。この國家が受けたる特殊の、時々極めて驚ろくべきすべての變化を、その因果連絡に於て辿りゆき、以てこの群像の生命中核を感じなければならぬ。何となれば實にプロイセン國家は、正さしく、凡そ統一體として把握し得べき經驗界のそれらの對象の中に屬するもので、これらの對象が精確に價值判斷せられ得べきは、唯だ吾人が諸の變化の跡を辿り見る場合のみに限

らる、而してこの諸の變化が測り知り難き、且豫見し難き特別の諸事情の連繋により、國家の本質を害ふことなしに、時代から時代へと改善しゆくからである。一民族の歴史について知識を取得することは、それが全時代の經過に互ると、その民族存在中の一定時期に限られることそのいづれを問はず、常に吾人の間に行はれることである。個々の人間の傳記も亦その英雄の一生涯中に於ける一定の出來事を、その把握點(時點)と考定するといふ技巧を吾々に示す。傳記者は、それで、我々に一個の狭い期間(ペリオード)の諸業績及び體驗の敘述を提供することが出来る。かくの如く一階段より他の階段まで遷りゆく影像是全然統一的に把握すべく、且つその中でこの個性の特殊生命を精神的に認識すべきである。各時期の設置(時代區分)はいづれの歴史考察にも缺くべからざる技巧である。この時代區分は、同一の

對象に關して、總體として再現すべき表象影像の内に於て、次から次へと現はれ來る現象を、他から差別的に記憶に留め得る記憶能力に依るものである。

第二節 史學の他の精神科學に

對する關係

歴史考察の仕方とは何か。それは、吾々が苟も不規則に反覆せられる何等かの變化をば、その因果關係を指示することによりて理解せんとする自己慾求を感ずる毎に、吾々自身の經驗内容に關係さして、常に適用し得べき一個の根本的精神作用である。この際、常に問題として重要なのは、吾々の經驗對象の統一として、吾々が自分にその表象を作り、從つて再現せんとするところの一の錯雜した事件について、その知識を自分に取り入れるに當つて、吾々の意識統一を維持することであ

る。かくて吾々は若干の自己觀察をした後で、多くの表象内容の間には次の差別あることを容易に發見する、即ち、規則正しく反覆される變化に關する表象内容と、現象に對する吾々の關心がまさしく確定事變の異常、離立、特殊そのものに向けらるべき表象内容との差別である。前者の場合に於ては、吾々の形造り得る概念は、對象の定義が與へられさへすれば、既に、如上の規則正しく反覆せられる變化を、吾々の經驗事實として抱括し得るものである。かくの如くして例へば月なる概念には、吾々が豫想すらし得べき月の盈虛、その宇宙間の運行、及び蝕缺についての知識が存屬する。これに反し、若し吾々が、一偉人の生涯の發展の如き、經驗上唯だ一度しか起らない變化の經過を把捉せんとするならば、いづれの個人に於ても反覆される様な、幼兒、少年、青年、壯年、老年てふ次々に起る諸現象の自然法則的に與へら

れた系列を以てするだけでは、眞の理解について何等の獲るところもなからう。又若し吾々にして吾々の興味を惹く一個の人物の生涯の道筋の内にて、個々の特色を餘りに誇張して甚しく『特殊的』に描き、それがために他の如何なる人物でもこれに對する類似を與へ得ないとするならば、これ亦た吾々の爲めになること少からう。之に反して、若し吾々にして、個性の活動には本質的に差異あることを、二つの相異つた時期を取つて確證し、而して、この個性の所有者が同一人なるにかゝらず、如何にその人物の後の生活動作がそれより以前のものど全く違ひ得るか、即ち例へば如何に一人のサウルが一人のパウルスとなり得たるか、といふことを明瞭にせんとするならば、吾々は、より深く突つ込んで人物の個性を理解し得やう。吾々の有する人間知識、及び世上經驗は、人間の處生に對していつも働き込む極めて複雑多様な

關心集團の内から、その時々に重大な勢力を有つてその人の動機の尺度となるものが、前の時期と後の時期とで、全く異なるといふことを、吾々に推想せしむるやうにし、之が理解の鍵を吾々に與へる。若しこの同一個性に於て、如何に徐々に或は又急激に關心を集中し、從つて又意識の中心が推移するか、といふことが指摘されるならば、吾々は吾々を満足する解釋、即ち普遍的法則もしくは認容された規約への歸結に達する。かくの如くして歴史考察の本來の目的が成就せられるのである。この目的の達し得られない場合には、吾々は自己の蒙昧を告白許容する外致方ない、即ち、この場合、吾々は未だ正しく此の人物の生命の發露を理解してゐないのである。

されども、苟くも高い文化發展程度にあつては何人をも惹き入れる斯の關心集團は、事柄の種類別に從つて、系統的専門科學の對象を形造る。こ

これらの専門科學の領域内に於ける凡ての諸現象を概觀し、又それらの諸現象中に於ける事實上の連絡を指摘し、又その連繋の規約及びこれらの科學の對象相互間の依存の法則を確立せんがため、これら専門科學は各自一定の概念から出發する、例へば哲學、法學、國民經濟學、及び美學は、かゝる系統的科學である。これらの科學は、それらの有する原理に従つて或る一定の概念から出發するところに、大いなる長所がある。即ち、彼等は常にその考察範圍内に於て現實生活の諸經驗と結び付けられてゐるのならず、實に演繹の法によつて、彼等の系統中システムチックに於て、それ自身成立する思惟産物として、他の同種類の事項と共に、自ら或る豫定せられた仕方仕方で、完成され得べき新しい概念上事項をも創造することはである。これらの科學には、その妥當範圍如何が問題となつて來る以上、苟もその學問が抽象したるもの

は即ち概念影像であり、従つて、その學問の支配する範圍のあらゆる事實現象に對する標準となる。例へば、法律學に於て、人權の法律系統が羅馬人の間にあつて最も鋭く、且つ最も明瞭に作り上げられたといふ贊辭が、彼等に與へられ、又た言語學はソフォークレスの戯曲中に於て、世界文學中の他の如何なる詩作にも見られぬ純眞な美しい言葉を見出し得るのは、是れがためである。かくの如くして、すべての科學は、各自の原理に隨つて過去の事實を徹底せんとする限り、既に起つた、吾人の思ひ出に價ひする過去の變化に關する吾々の表象の建設に協力する。されどこれらの學問のいづれのものも、一民族の生活全體の纏つた影像を與へるといふことは思ひもよらぬ。何んとなれば經驗の教ふところによれば、事件の變化にあつては、常に極めて種々雜多なる關心が、相互に共働し纏綿するのみならず、人間の欲せざる

自然現象も亦た屢頗る決定的の勢を以て襲ひ來り
あらゆる人知の豫測を顛覆することがあるから、
例へば雅典に於て黒死病が破裂してペリクレスの
大規模な政策をして一敗地に塗れしめた如くに、
不斷の豫期しない天災が、努力された事件の進行
を攪亂する。それ故に、既に成立したる、若しく
ば尙ほ將來分立せんとするあらゆる系統的的精神科
學と相並んで、いつとも尙ほ吾が歴史物語が存
在しなければならぬ。このものゝ目的たるや他な
し、吾々の興味をもつ一個の對象の諸變化を一個
の統一的に表象し得べき系列と見立て、キートン、マ
イグントリヒ、グエーゼン、イスト『それは
元來如何であつたか』を確立することである。

種々の系統的的精神科學の研究に向はんとする若
殿輩が、その思索道程に於て、レファレント、デルチンゲ事物の眞實を見失
ふの危険に陥らないやう、よくこれを救護するも
のは、唯過去につきての充分なる知識のみ。

第三節 世界史の對象

上述の如く、或る一民族の歴史をその異りたる
時代に區別して理解せんとするにしても、尙ほ次
のことが認められる。即ち、決定的意義を有する
甚だ多くの出來事は、その民族生活の内部の變化
よりしては理解し得られないで、外部からの影響
と國際上關係とにより、その本來の衝動をうけ、
その重大さを獲得すること、是れである。遠き過
去に於て個々の民族の間に現はれ來つた公的生活
上の或る諸現象は、後世に至つて諸外國から攝取
せられ、更らに他へ傳播せられる。かくして例へ
ば、一二九五年エドワード一世の創立にかゝるイ
ングランドの諸侯及び諸都市の代表者より成る
バイメント國會の規則正しき代表制度は、十九世紀に於て
番に獨逸、伊太利その他歐洲諸國のみならず、遙
か日本に於てすら模倣せられてゐる。それから二

十世紀に入つて露西亞及び土耳其、波斯及び支那も亦た各自議會制度を採用してゐる。若干の大國に於ける最高世界的尊嚴の把持者の名譽表彰は、羅馬人ユリウス・ケザールの名に由來し、而もこれら大國家の領域たるや全く以前の羅馬帝國の境外に存在して居る。大西洋彼岸なる新世界に於て古希臘建築様式が盛んに行はれることは、恐らく吾人の間に於けるよりも一層顯著で、又たアメリカ印度人もカスチリアの慣用語を採用してゐる。今日人間の居住せる全き地上は種々の共通な利害と相對的關係とに支配され居ることは一目瞭然である。吾々の時代に於ては最も懸け離れた國々でも、世界交通及び世界政策によつて相互に結合せられ、相互に依存して居る。之を同じく、範圍こそ狭いが、蒸氣及び電氣時代より以前にも亦た、相互に鞏固な連絡を保てる諸民族の團結があつた。この諸民族團結の絆及びきづなこれがために蒙つた影響

や、避け難い改變やに拘はらず自己特性の保存は數世紀來、各民族個性の最高生活に缺くべからざる要件であつた。吾々は比較的重要な民族の歴史を知る際、吾々はその最も重要な民族組織を培養建設すべき如上の超國民的ユベルナチヨナリレイベンクエメントの生活要素といふ一個の觀照をも看取し得る。されば諸ろの國際的關係は、吾々に歴史的に知られてゐる諸民族の盛衰興亡に於て最も本質的な因子を形造つてゐる。

今若し吾々が歴史敘述中に於て統一的に直觀せしめる最も廣大な對象を把握せんとするならば、すべての、若しくは最重要の諸國民史を次ぎ／＼に羅列しては問題となり得ない。何となればそれでは觀點が一の舞臺から他の一舞臺へと、ほんの地理的に移されるに過ぎないから、又た現に存在して若しくは曾て存在したる有りと有らゆる民族の總括としての人類てふ概念は、相互に連絡ある歴史敘述を貫く統一の糸としては用られない。何

となれば過去にも現在にも地球上には別に離れた民族群團があつて、他の極めて主要なる諸國民を共通に連結する國際關係には、自分が自動的にしてゐても、はた是等の他者そのものを動かす利益關係があるにしてゐても、まだ參加してゐないものがあるからである。それ故に、不規則に反覆される而も尙ほ重大な諸ろの變化より成る一系列の中に於て總體としての人間のために、一個の諸事實に相應せる方法において、如何なる歴史叙述にも缺くべからざる光明の泉を投げ與へ得るといふ、一切を貫通する因果連絡は、到底存立しないのである。されば、一個の人類史といふものを抽象しても、それは前述の諸國民史を唯だ集めたものと同やうに、これ亦たかの歴史叙述に取りて當然期待さるべき概念の統一を保持し得ない。

それよりは寧ろ、世界史を科學的に取扱ふに缺くべからざる先行條件は、こゝに一歴史生活があ

つて、幾世紀の經過のうちに、一民族圏から他の民族圏へと不斷に進歩しゆき、而して、この生活がその内面的連絡に於て、現在之に參加せるすべての諸國民間の共有財産として感受され且つ生き／＼活動して居るといふ假定である。多くの事件の推移の裡にかくの如き基調メロストラクが存在するといふ事實は、すべての思索者の一致して抱懐する確信であつて、吾々の廣大な體驗に際して常に繰り返し自覺に上つて來る。それは、吾々が若し、既に滅亡せる諸國民の遺したる文化の重要な特性がこの世界的發展過程に參加してゐる有らゆる現今生存の人間に、どれ程決定的に影響してゐるかを注視し、これに反し、文化の程度は高いが、この人間團體にまだ十分引入られたことのない國民が、如何に如上の昔の文化國民の特性に對して無理解であるかを反省すると、さうである。多くの支那人及び日本人は、夫が妻に愛着するがために

その父母を棄てよと要求する聖書の『不道德』に關して、心から眞實の憤怒を發するであらう。何となれば、彼等にあつては親のために自身を犠牲に供することを、子たるものゝ義務として、兩性間の愛情より重いとされて居るからである。これに反して、良家の子女が、輕佻な親爺の借財を償ふため自己の名譽を犠牲に供せられた場合でも、彼等はこれが當然で安價なものだと思つて居やう。

こゝにこの東西兩世界は處世上の根本原理に關して、尙ほ納齟相容れない對立をしてゐる。併しながら、かの歐羅巴の舊約書の創世紀に典據を有する考方が、時の推移と共に、東亞にも移されて實現することは豫見すべきである。進取的の日本は實にその最新の立法に於て既に、夫婦が相互同權の結婚享有者たること、また兩親がその子供を彼等の意志に反して不道德なる身持に強む得ないことを確保してゐる。宜なる哉、大史家ランケは

その世界史の緒言に於て指摘せることや、曰く、諸國民の文化努力に於ても、歴史の列強の影響をうけて、ダスアルグワイネ 普 ダス・ベソフデレ 遍から特 殊が改造されること。

然らばランケの意味に於ける世界史の對象とは何ぞ、苟も一個の歴史生活が進歩して、一民族から他の一民族へ推移し、一民族圏から他の一民族圏へと流轉し、而して一個の、ナチヨナリテメツン 諸國民によりて創造されて、而もそれから獨立して活潑に克服獲得されたる利害共通の團體を現出する、かくの如き歴史生活が認識されて居る事變叙述が、即ちそれである。これがためには、これに對して決定的影響を及ぼしたあらゆる時代、あらゆる人間を考察に入れねばならぬ。否な、ひとりこれらのみに止まらず、尙ほ如上の生活に入込むで促進又は妨害をなした自然界の出來事、及び偶然の事變も亦た、それ〴〵記載の場所を得て、以て是等のものが一切を包容する歴史生活の進捗の上に如何なる

影響を及ぼしたかをも認識し得るやうにする。

何はともあれ、大體から見れば、民族と國民史との中で非凡な諸人物との、總和活動は同時に働いてゐるすべての他の要素よりも、遙かに一般歴史生活に取つて重要である。さればとて若し民族の世界史的作用、次に他の一國民の世界史的作用を、次ぎ／＼に特別に取り出して、以てすべての主要民族の系列を通りすぎるとしたら、それは行き方が間違つてゐるであらう。何となれば、かくすれば相互に對立せる努力と努力との相錯綜し相纏綿する姿が顯著に現はれて來ないだらう、若くば多くの同一叙述の重覆が必然避け得なくなるだらうから。人もし個々の國民の一世を統導する勢力を力説するならば、世界史の叙述は必ず常に時代綜合的に行はれなくてはならぬ。即ち種々の國民が同時代に齎らし來り、成し遂げたところを、その協同働作が一般歴史生活を左右する限り

同一の叙述場所に於て、同じ觀點から闡明すること、是れである。

第四節 世界史的運動の原動力

一個の歴史的描述は、その選擇主題の輪廓の裡に確かに入り込みしむべき、無限に豊富な個々の事實變化を、到底悉くは網羅し切れない。それは人間相互關係に働いてゐる因果連絡が餘りに多種多様なのである。凡ての部分に互つて過去の眞相のいはゞ寫眞のやうな精確なる再現、即ち吾々の知識の源泉たる諸事實を悉く一樣に且つ充分に記述することは、唯だ一個の事件の機械的再現となるばかりで、却つて人間の思ひ出がそれで十分高價に尊重される所以の精神内容ダスイデエレグハルトそのものを缺いてゐる。歴史記述は、概念上把握された統一の生活コンテイスイテトデスレーベンス繼續を、後から精神的に再寫するのであるから、苟も同時代並に後世に垂示せんと

欲する如何なる歴史著作でも、高度の意味に於て一個の藝術品でなくてはならぬ。すべての精神科學中、歴史は希臘人が九つのミューズの一つ、クリオの女神の冥助を割り當てた唯一の精神科學である。それ故に史學には次の如き任務が横はる、即ち、現實なる各種の現象は人間にとつて如何に重大なる意義を有するかを摘出し、又た重要な出來事が全歴史的思ひ出の組織中に於て、如何なる位置を占むるかを明白にし、且つ後世の人間の有する自己感情及び能力意識に取りて、過去の現象が、如何に普遍的價值を有するかを値踏みすること、これである。これらの重大な任務を満さんがためには、歴史家たるものは、一切の因果連絡中に活躍する人間の關心及び有目的行動ツヴェックハインテングにつきて共鳴し得なければならず、又幾多の相似たる人間の努力の跡を相比較し、相對照し、以て自己の眼前にある對象の特色を造型的に浮き出さし、それ

に適切な判断を下すといふ天分を具備しなければならぬのである。果して彼がこの自分に與へられた任務の遂行に相當の成績を奏したるか否やは、同時代及び後世の幾多の専門家ばかりでなく、歴史の同好者達からも、何等他の如何はしい副目的に迷はされない判断に待つべきである。この際彼の下せる事實の断定が信すべきや否やの疑は、必ず考證及び尙ほ後に説かんとする批判的研究によりて、決せらるべきである。さりながら、歴史家が大いなる因果連絡を把握し、又た之を批判する機能の基礎は、殆んど全く彼の精神本質の全體如何に存する、随つて、彼の創作活動のあらゆる存立條件如何、彼の天賦の能力及び性格の素質如何、並びに、彼の知識攝取に好都合なる條件及び人間衝動力に關する一般的經驗如何に在る。吾人は茲に思想の蘊蓄や、出來事に對する同感力の廣大さや、歴史家がその對象の取扱ひに持ち出す自

家の創作的想像力やを、歴史家の意識材料と名づけ、而して之を、自分の先入主や、附き纏ふ黨派心やに囚へられないで、自由に働かしめ、以て證據物件に依る過去の現實の精神的再寫をその真相のままに完成することを、歴史家に期待する。

すべての歴史家及びその同好者たちが、この意識材料に於て一致契合することは、唯だ極めて一般的な根本特相に於て指證されるばかりである。

吾々は歴史考察の第一公理として、その際主要着眼を自分の關心に適合する動及び反動に注ぐべしとの法則を立てることが出来る。何となれば多種多様の利害關係の有意識的繼續、及びこれに關連する相互作用に立つ人間の有目的行動が、歴史生活の主要内容を形造つてゐるからである。すべての有目的行動は、現存の利害關係を維持し、擴大し、又は新利害關係を實現化するか、若しくは

制限するかに役立つべきであるから、吾々に理解出来る。數多の系列をなせるこれらの人間の有目的行動は、一個の共通の目的に向つて居ることによつて、宛ら相つながられる鎖の如くに感ぜられ、關心の變化と共に増進されるか若しくは沮害されるかする。かくて人間の自覺中に自分達の目的の一致に依つて、或る利害の總合が入り來り彼等は之を現に存立すと認め、それによつて之に一個の客觀的存在を賦與する。この諸の利害關係の總合に參與するために、人間は、このより高い目的の實現に犠牲を捧げる何等かの團結に仲間入りし、若し認容せられない反對の利害總合の側に立ちて戰ふ友人や團員があれば、是等から分離する。されば、この浮世の利害總合の實現過程と關連して或は希望を抱き或は憂懼を感ずるために、茲に反目や軋轢や争鬪やが起り、若しくはこれらを避んがために、協調、盟約、自己制限が生ずる何んと

なれば吾々が自己の自由に行使しうる自然の救済手段には常に限りがあり、而も吾々は自己の精神上利害の承認と、存続とに向つて努力するからである。吾々は、諸種の利害の様々な總合が形造られ、且つ種々異りたる利害圏を差別しその限界を永續的に劃する試みが作成せらるゝところ、そこに歴史生活を瞥見し得る。是に於て、常に數多の人類及び人類集團が、相共通する若しくは相容れない利害の總合を、自己存在の永續的構成要素として、自ら意識するのみならず、後世のつき／＼の子孫も亦た、父祖の有目的行動によつて築き上げられた利害總合を、自己のものとして要求して自ら當然と感ずるに至る。かくの如くして一個の歴史過程が生成し來り、この過程の中で、自分等が種々の利害圏と一緒に生ひ立つと自ら感ずる人間達の動及び反動によつて、數多の局面變化が進展されてゐる。この過程にヘーゲルの原則

『對抗なきところには、亦た何の利害關係もなし』及びその逆理、『利害關係の存する以上は、對抗なき能はず』は正しく妥當する。

故に優先を競ひ、權力を握らうとする爭奪戦は世に絶ゆることなく、而して早かれ晚かれ、人生がこれに動かされるといふ假定は、歴史的把握にとつて、第二公理に價する。

より尊き利害の増進と利害圏の擴大と共に與へられたるこれらの對抗中に身を没滅せしむるを欲しない人間及びその社會は、他の人類との接觸から遠かり、外人に對して嚴重に自らを閉鎖しなくてはならない。最近に至る迄人類の交際を避けた世捨人たちが現に存在してゐた。支那人や日本人朝鮮人の如き大いな開化した國民でさへ、數世紀間外界に對して殆んど完全な鎖國状態を人工的に強行してゐた。かくの如き努力は、飛び／＼の僅少の例外である、若しさうでなかつたならば世界

史は出來無かつたであらう。されど通例、人間又は諸國民の大多數のものは近隣及び遠き世界の各地との交通を避け、もしくは阻害するより、寧ろ喜んで之を試み、これを促進するを可とした。この際、主として次の四個の民族生活の根本衝動が世界史的意義を有するものとなる。

一、各個人、及び人間團體は、他國人との交易に於て、自分に有り餘れる限りの自國の產物に都合よき用途を發見し、これに換ふるに自己の風土の下に産し得ない外國品を獲得しうることを確信し易い。獨逸の家庭で珈琲、茶、米及び熱帶產香料を消費し、又は木綿、絹を被服用に供することは日常生活狀態改善に對する國際關係の重大さの證據である。天產物が地球表面に不均等に分布されてある故に、この物質上利害關係が市井の日常人から、知らず識らずの世界公民を拵へる譯である。全然外來の產物なくして濟む所謂、『自給自

足』の國土は未だ曾て有つたことはない。

二、未だ生まれぬ、若しくはその住民、及びその近親人民によりて未だ充分に利用されない地域の爭奪は、一般生活の一要素であつて、これがため相抗争せる黨派に努力を喚起し、發展の能力を齎らすに與つて特効がある。故に移住、經濟的發展、對抗競争、軍事行動が世界史の大部分を充してゐる。歴史家に取つて、これらのものは、大いなる民族の結合喚起の原因として別して重大な一個の間接的意義を有する。

三、吾々が信仰に頼りて自ら昇りつめ得る最高眞理を、他の出來る丈けの多數人類に攝取しうるやうにし、かくて常に『教化して』既得信仰に對する新らしい信奉者を獲得せうとする努力は、人間の宗教關心に基づくのである。この際でも種々の宗教團體が競争して來るから、彼等は以前からの冷淡者が徐々に化して『改宗者』プロセリテとなることを待つ

て居ないで、自己の民族中、未だ救済眞理の徹底しない階級や、諸外國やの間に宣教師を送る。かくて國の内外に於ける傳道事業は、いろ／＼の時代に極めて大いなる影響を齎らす世界史の一要因となる。

四、通商及び交通は最古の時代以來、諸民族及び文化圏結合の一個の量るべからざる重要手段であつた。購入と販賣との慾求を、安全なる通路によつて物資輸送を以て兩々相當らしめんがために、各地方市場から往來の道筋が紡ぎ出され、遂に全き地球が天下周知の通商關係の網で恰く連繫されるに至る。かく物資交易に關與することは、いかなる勃興せる國民にとりても拒むべからざる必然の慾求である。それ故に通商、貿易に關する協定が出來て繼續する、これは唯だ傳統慣習に基づくか但しは契約によつて明文で規定されるか、いづれにしてもさうだ、旅行や一個の不斷の通信事務や

によつて、すべての國々の間に、世界市場における物資交換の出來る關係が確定され、相互間の提供と注文とが出合ふやうになる。交易を容易ならしめるための評價標準が次第々々に立てられて國際的に通用する。物資交換範圍の擴大は、いづれの場所に於いても、商業界に影響して活氣を喚び勤勉を促し、敏感を目醒し、而して發明心を刺激する。

要するに、吾々は、いつの世の時代でも、遠隔の地より渡來せる天産物の消費と、認定された國境を越えて向ふ側への征服慾と、宗教上の宣傳と及び商人、海員の企業心とに基づく國際關係とを豫想假定して、それ以上に何等のより深くたち入つた理由附けを要しない。

第五節 世界史的連絡と國民的文化

人間各個の努力、及び慾望から超國民的關係さ

へも喚起せしめた如上四個の根本衝動は、その全部がすべて自由展開に上らなければならぬ、それでこそこれに關與せる民族は自己に可能なる限りの高い文化作成に到達するなれ。支那人の如き一大民族にあつても、外界に對して自ら鎖國し孤立を墨守すると、數世紀も經過するうちに、彼等には、新文化を組み上げる起因動力も作成衝動も涸渇する。時と共に、後世では充分なる努力と新鮮な生活との代りに、古い傳統や慣習が有力となり因習的振舞に對立する異つた新しい遣り方の有りうることを、少しも意識しないやうになる。規則は争はれず、形式は變へられず、個性の發展に桎梏を架し、以て人間を惱ましその活力を鎮磨せしめるに至る。かくては國民の精神上眼界は愈々狭められる。遂にはあらゆる公的生活上問題も、あれが丁度當嵌るとその範例を古に求め、ひたすら過去の方向に従つて行くことで、片付けられる。

一切の事物が外見上すべて昔のまゝで改へられないとすれば、誰も彼もそれで満足するが、その常となる。それで世界史的運動の渦中に立てる他の諸民族は、この孤立せる民族を見て一個の『永劫に靜止せる』民族である位に變動が少いのを、その特性と思ふに至る、されど、地表の狭い空間に於て、自己の生活經營の活動に要する地域を得なければならぬといふ諸民族間の避け難い生存競争によつて、若干の時を経た後、いよゝ『靜止は退歩なり』てふ諺の眞理が、いつでも、彼等に分つて來る。この時、かゝる化石状態に達したら、民族は滅亡せねばならぬことすらも明白となつて來る。この際、かゝる保守民族が、これでは此上到底遣り切れないといふことを俄かに覺り、出來る丈け速かにその昏睡状態から脱せんがために、忽ち意外にも大々的變革を踏み出して、かの『永劫靜止の民族』といふが如き觀念影像が、現實と

一致せず、唯不十分な對照に基いて生じた迷想であつたといふ實證を擧げる。見よ、支那に於ては皇帝の意志に對する屈從が國家生活の根本であるといふ、尙ほ數年前まで支那研究の學者間に行はれた定説を裏切つて、中華帝國は一個の共和國と變つた。これ世界の氣勢が、千古の大いなる文化的民族の間に傳來せる神聖視された思想よりも、一層有力であるからである。凡そ世界史の推移に參與することなしに現代の水平に立つ文化は、一體に存在しないのである。

それは、人類活動のすべての領域に於ける最高業績は、諸民族相互間の授受關係に基いて生ずるからである。言語が用ゐられ、諸國民間の交互關係及び各民族の體驗から、生活の改良安易並びに吾々の精神的存在の向上のためになされた收獲の總和が取り出される。吾々はこのものを名づけて當該民族の文化クルツチャーもしくは開化チビルイゼションとよぶのである。

有益なる制度、發見、發明は屢々一民族から他の民族へと傳播され、この傳統は、吾々をして正常的關係の下に不斷の進歩の存在を豫想せしめ、因て文化史又は文明史として、とりわけて取扱はれてゐる。これは過去に於て如何に人類がその精神的感覺的天性に應じて、造物界に於ける自己の地位の限局を切り開かんと努力し、かくて一層高い存在に向上したかを論述せんと欲す。この際、四個の並進する努力が甄別される、これらは吾々がいづれのより、重大なる意義の文化活動の考察に際しても、必ず追究せねばならぬものである。

一、現今最も顯著に眼に著くは、人間の目的のために自然力をより能く支配及び利用することによつて達せられた進歩である。古代に於て人手と人力とによりピラミッド建造用の大石塊を動かしたことは、勿論今日の事情を以てしても尙ほ且つ十分素晴らしい豪氣なものである。併しもし吾々

が當時、國王たちのため是等の墓碑を立てんとて

人間がどれほど汗を流して日々の賦役に虐げられたかを身に泌みて思ひ浮べたならば、吾々にはこの艱難辛苦の價が餘りに高いと感ぜられる。人間は次第に利巧になつて、力一杯の荒仕事の代りに獸力、風力、水力、蒸汽力及び電力によつて運轉する機械を利用する。吾々は今日化學上の結合によつて、回り路ながら純粹な形と安價な方法とで染料を獲得したのであるが、そも／＼この染料が昔は如何に稀有で高價であつたかは、今尙ほブルプール(purpur, purple)なる語に於いても偲ばれる。古代に於て考へられ得ない急速度を以て今日いかなる人も遠かれ近かれその仕事場に到達し得る。技術及び工業の業績は徐々に改善されて本質的に自然に對する人間の關を改めてその位地を高めたこと、及び斯の如きは文化進歩の最も手に取るばかり顯著な方面であることは、何人にも明

白である。

二、人類の全體努力の第二の作用を、吾々は歴史の經路に於て國家建設の働作として把握することが出来る。この作用の目的及び形式にも吾々がよく進歩と名づけ得る變化が感知される。絶えず擴大なる範圍の中にて、總體者は強制的秩序と、人民保護の法規とによつて、自己の權力を、弱者及び壓迫された者の擁護の用に供する。苟も理性的存在である以上、一切は權利の能者であり、法律の前には平等なりとの原則が認められる状態は極めて徐々にやつと到達され、尙ほ、それが大なる國家の場合には、すべての公民は代議制度によつて、立法及び公的生活の重大問題決定に對する參政權を保有し得た。この政治領域に於ては、勝手に變へられ易い形式よりも、自由の感情と、人民同志は相互に對し、臣民は政府に對して、各享有する法の確實性が、重きをおかれてゐると

いふことは、容易すく分明すべきである。吾々は自分の脳裡に描く理想の法治國の實現に、かくして、近寄るのを見ると信するならば、國家生活に於ける變革に對して傾倒されたあらゆる努力の目的も、吾々にはおのづから自明となる。常に各民衆の政治的發展のみならず、政治上原理も亦た理論的評價よりも歴史的考察によつて一層よく理解され得るといふことも、その基づくところはこゝにある。

三、あらゆる人間團體の有する第三の一般的生活要素として、社會的交通の樣式と設備とを擧げねばならぬ。各個人の自然的差異、及び環境から惹起された様々相異なる日常生活は、人間のをりをりの偶然的接觸に際して、『身分相當』のものとして固持され、當然と感ぜられる交際の習慣及び規約を行はしめる。こゝに低い社會段階から高い社會段階への向上も、その反對に上層から下層への

墮落も亦た起り得る。諸ろの社會段階の梯子は幾多の派生の萌を吹き、それらが時の推移とともに増加し人々の渡り歩きを一層容易ならしめる。現在狀態に於て他と區別されたる各階級の中には、一個の優ぐれたる者が出來て、容易に一つ次ぎの上の階級の平均水準に達し、若しくばこれを飛び越すことすらある。かくして上下の階級間の交際基調に於ける差別は、相互に削り平げられゆく。

下層階級が社會上の交際に於て自己の人間品位に訴へて要求する所は、遂に彼等に與へられないで置く譯には行かなくなる、それは政治的、經濟的及び社會的生活に於て不斷に激して行はれゆく階級闘争が彼等の利益に決定するから。古くから權利を有する伊太利小貴族の一門は、十六世紀中葉以來、一般の人民の誰れも彼もが自分を貴族同やうにシニョール (Signor 君) と呼ばれやうとしたのに、よしや不服であつたらうが、それでも彼

等はこの要求に従はざるを得なかつた。以前に目下の者に對しての慣用語なる『彼奴』(He)は勿論のこと、下層社會の大人に對する偏用語、貴様と呼ぶこと(Duzen)すらも停められるの外なく、或ひは消え失せんとしてゐる。敬禮表示の場合、尊貴に對する稱號に於ても、相互に對する用意に於ても、いろ／＼變化があらはれて、社會變遷の傾向を象徴する。社會的文化は、またすべての民族及び人類にとつても一個の願慮に價すべき財寶であることは、歴史家及び外國の事情進に看取されずには居られない。

四、文化史的概観は、人類活動の第四方面、即ち思想の所産、文學上著作、藝術上創作に於てその最も得意とする對象を有する。何となれば、これらは文化的民族の具有する素質と能力とを最も自由に且純粹に表現する人間的活動であるからである。一民族が他の民族と比較して如何に重要な

るかの標準が、勢力ある宗教や科學の培養や、藝術品の美的價值などに於て求められると、吾々は容易に信ずる。これらの文化所産に關する判断が既に定立し、またはその意義が容易に理解されるやう出來て居る以上は、これらのものうちにある程度まで國民精神が體現されてゐると見られる。否な、更らに進んで、若干多數の民族には、一定の領域に於ては他民族の企及し難い特殊なる天賦の能力ありとまで言はれる、即ち彼等はその領域に於て傑出せる代表者を、より澤山に輩出し得る。されば實に廣く行はれてゐる判断によれば、希臘人は天賦の素質として特殊な藝術的能力を享受した、羅馬人は『卓越せる政治的民族』であつた、又た英國人は『生れつき無類の利巧者』として實利感を有つものだとなつてゐる。もつと廣い範圍に於ては、或る特個の人種に對して、一の特殊領域で文化傳播者として他よりも優ぐれてゐる

といふ定めが與へられてゐる。例へば、吾々の一般に周知する有ゆる一神教の創始者は、モーゼの如く、基督の如く、モハメツドの如く、セミチツク種であつたことが、若干の文化史家を誘ふて忽ち誤れる一般論に出でしめる、曰く、血族關係と共通の祖先とで結合されてゐる諸民族は、特殊の天性と本能的傾向とを具備し、因つて専ら宗教的思想の創造に適して居つたと。併し吾々の見るところでは、古代に於てヘブライ人の國民的神に超世間的尊嚴を賦與するやう、正さしく之を動かししたのは、彼等の遭遇した世界史的壓迫であり、而して基督教並びに回教の大いなる成果も亦た主として世界史的事件の變化にその因を發してゐる。人類文化活動のいかなる領域も、その生活現實に於て、孤立的立場にあるものでない、隨つて吾々はそれに屬する諸現象の因果連絡を理解するに、世界史の糸筋を辿らないでは、完全に出來ない。

されば哲學史も、意見の論争に於て一時は勝利を占めたが、まもなく卻けられる哲學思想を、唯だこの時承認されたとか次の時に排斥されたとか報道しただけでは、その任務を完うし得なからう。若しそれにも拘はらず、卓越せる諸人の哲學者にして、古來の偉大なる思想家の哲學上の確信を、只だ並べたて、何等かの哲學思想の經過の移動が組みたてられ、隨つてそれで一個の哲學史が出來たと信するならば、彼等は活々とする現實の代りに一の抽象を築いたのである。勿論、かくの如くして、宇宙知識に關する尊き思想の庫を、年代順を逐ふて、容易に通覽せうとする功利的目的が達せられるか、どうかといふならば、それは別問題である。しかし苟も一個の歴史的描寫たるには一定の専門的に把握し得られる領域に於て吾々の興味をひく知識の所得が、只だ積蓄貯藏されてあるだけでは、決して満足してはならぬ。歴史的叙

述は、人類努力の全體よりして、苟もある選ばれた視角の下に指示さるべき諸現象を喚起し、是等をその世界史的意義に高めたる、有らゆる連絡を一つ追究しなければならぬ。文化國民カルツァエチオニエンと政治的民族ポリティカル・ナショナル・ハイデンとの差別も、また餘りに誇張されて、一個の政治的結合の基礎なくとも、一個の國民的に纏つた文化が存立し得るものと考へては、よろしくない。かへつて吾々に目のあたりに見ゆるところは明かに、すべての獨立的文化促進力は常に一つの單個なる國民性の限界を越えて働かんとし、更らに進んで、あらゆる人間の衝動力を利用して一般に可能であるところまで、自己實現せんとする趨があることを示して居る。されば通例、吾々が概念上區分し得る種々の文化圏は、吾々の生活經驗に従へば、吾々が一個の明確に認識し得られる民族個性を許與しなければならぬ團體よりも、一層廣い。吾々は、種々の文化圏に於て結合せられ

たる諸民族に對して、『自然民族』ナチュラール・フォルケルとして、本來の野生状態を通りこして向上することも出來ず、自ら一個の文化生活を創造するか、若しくは外來の文化財を攝取して自動的に消化利用することも出來さうもない他の民族を對立さし、兩々相容れないものとすることは出來ぬ。若し今尙ほ歐洲以外の地球上部分に於て『野蠻人』としてあらゆる文化圏外に棲むやうに思はれる民族があるといふ場合でも、次のことを豫想してかゝらねばならぬ。それは、猶ほ古代希臘人羅馬人に文化無しと記述されたスキテン族、又は中世のタタール族の如く、よしや、無拘束なる原始生活の自由から、骨の折れる不斷の勤勞を基礎とした一個のより高き存在の秩序に移りゆくことは、如何に、困難であるにしても、若しくは困難に見え得るにしても、彼等はいつか將來に於て、その自然状態を脱して、人間の精神素質に相應した向上状態へ結び著くなら

うといふこと、是れである。(第五節完了)

雞 慕

瓜 哇 紀 行

(下)

文學博士 松 本 文 三 郎

五、千 佛 寺

(一) 其 構 造

Tjandi Borobudur (又 Boroboeur) 即ち千佛寺は余輩が今回瓜哇寄港の殆んど唯一目的地ともいふべき所である。千佛寺はジョクジャの北西、約十六哩の地にあり、ジョクジャよりスマランに至る汽車線路より少しく西に距つて居る。で若し汽

車を利用するならばジョクジャより Moentian に下車、更らに之より馬車を取らなければならぬ。寧ろ自働車の便利なるに如かぬ。自働車ならば往復各一時間、半日を費せば可なり詳細に觀察が出来る。千佛寺の傍には小ホテルもあり、數日に互つて調査するには此に宿泊するを得、又日出日没の時の美觀を味ふにも此に一泊するを好しとするのであるが、余輩の此に至つた時は、前にも一言